

令和7年度学校評価結果

鹿屋市立鹿屋看護専門学校

【評価基準】 2.5～3：適切、2.0～2.5：ほぼ適切、1.0～2.0未満：やや不適切、1.0未満：不適切

	項目	評価 令和7年度	令和6年度
I	教育理念・教育目的	評価点 2.8(適切)	評価点 2.7(適切)
	教育理念、教育目的	昨年度より平均は0.1上昇。教育理念、教育目的はシラバス、教育内容、学校要覧、学生便覧、実習要項に明確に記載されており当校の特徴を明示している。これらをシラバス等に明記しており、学生の学習指針ともなっている。昨年度はこの項目が著しく低下したため、新年度に改めて教育理念・教育目的・教育目標の再確認を行った。その結果、各教員の実施する看護教育が教育理念・教育目的・教育目標に沿った内容となり、今回の評価に繋がったと考える。卒業前アンケートや基礎看護技術到達度評価等で看護基礎教育修了時における必要な資質の評価を行い、地域社会に貢献できる人材の育成という点で市立の学校としての目的を踏まえている。	
II	教育目標	評価点 2.9 (適切)	評価点 2.8(適切)
	教育目標	・昨年度より平均は0.1上昇。教育目標は、教育理念、教育目的と一貫性があり、卒業時の到達目標と各学年の教育目標をふまえて各学年の担当教員が1年間の教育目標を設定している。教育目標は、具体的で実現可能な表現となっており、各学年で到達できるよう具体的指針を立案して教育活動を行っている。	
III	教育課程	評価点 2.7(適切)	評価点 2.6(適切)
	教育課程 教育課程評価 教員の教育活動の充実 学生の看護実践体験の保障	・昨年度より平均は0.1上昇。教育課程経営は、教育理念・教育目標を達成するために教育計画・シラバス・学生便覧に指針を明示している。教育課程は基礎科目から専門科目にわたり系統立てて学べるよう構成され、各学年の時間割にも反映されている。教育計画では、新カリキュラム改正時教育内容の段階的関連性を考慮し、基礎分野、専門基礎分野を1年次に集中し、2年次の実習導入準備に配慮し、専門科目をじっくりと履修する配列へと転換した。技術試験科目を整理し、段階的に基礎看護技術を修得できる内容とした。その結果、1年次の配列がタイトな内容となっている現状がある。このことは、監査での指摘もあり、修正を必要としている。令和7年度のカリキュラム推進委員会では、令和9年度を目途に教育計画の見直しを行っている段階である。教員の教育・研究活動の充実は、これまでと同様に最も低い評価であったが、昨年より0.1上昇している。その中でも、「教員が相互に成長できるように、相互の研鑽システムが整えられている」が一番低い評価である。相互の研鑽システムとして、教育会議や実習リフレクション、校外研修の還流報告、校内職員研修などさまざまな機	

		会があるが、この内容が相互の研鑽システムとして認識されていないのではないかと考える。教員間の認識を高めることで意識して取り組むことができるかと考える。自己研鑽のシステムとして、教員ラダーに沿って適切な研修参加の予算獲得、時間割調整をおこなっている。研修参加後は教育会議の中で還流報告し全体共有を図っている。今年度から、専任教員の終日の実習指導体制から、週 15 時間以内の実習指導体制へと変更を行った。それに伴い、評価が極端に下がることも上がることもなく、学生には適切に指導ができたかと考える。毎年、低い項目は、「臨地実習施設は、養成所の個別の教育理念・教育目的・教育目標を理解している。」である。毎年、実習打ち合わせがあるため、その時に再確認をする場を設け、養成所の教育方針を伝えることで共通認識して指導を行いたいと考える。	
IV	教授・学習・評価過程	評価点 2.8(適切)	評価点 2.8(適切)
	授業内容間の関連と発展 授業展開 教員間の協力 評価とフィードバック 学習の動機づけと支援	・昨年度と平均は同様。本校の教育理念、教育目標のもと、一貫性のある教育課程が運用されている。シラバス内容も教育内容と整合性が図られ、学生への提示もわかりやすくすることができた。各自が授業計画に基づいて準備・教授から評価まで行っている。国試対策においては、1 年次・2 年次で段階的に模擬試験を実施し、個別指導へ繋げている。3 年次では自己学習確認や外部模試を計画的に実施。また専門科目の強化講義などを計画的に取り入れて実施することができていた。	
V	経営・管理過程	評価点 2.8(適切)	評価点 2.7(適切)
	組織体制 財政基盤 施設設備 学生生活の支援 情報提供 運営計画と将来構想	・昨年度より平均は 0.1 上昇。運営ガイドにて学校の目標が提示され、各教員の役割も明示されている。また、教員がカリキュラム推進委員会、ICT 推進委員会、看護研究推進委員会に属しており、各自の役割を担って組織として運営が円滑にできていると考える。校務分掌は始期目標立案、中間・最終評価を実施し、市の人事評価は上期・下期目標立案、上期末・下期末評価を実施し、自己点検・自己評価に反映させている。校務分掌マニュアルの見直しや改善を行い引き継いでいる。財政基盤は毎年平均が低い項目であるが、昨年より 0.2 上昇。本校は市立校であることから、学校運営は全て市費で賄われており、学校要覧に学校運営費歳入歳出内訳は明示されている。その他、回覧等でも各教員が財政基盤を理解する事ができる内容となっている。学習環境は建物の老朽化に伴い市の長期改修計画により段階的に改善されており、次年度ですべてが終了する予定。学生や教員が過ごす環境として少しずつ整えられていると考える。心理的、経済的に困難のある学生に早期に気づき個別指導やカウンセラーとの連携、奨学金等の紹介により就学支援に繋げた。学校の情報は保護者会、高校訪問、指導者会議、講師会議、広報誌、HP 等で関連する人々へ学校や学生の状況を伝え、学校経営に反映させている。養成所の運営計画と将来構想では新カリキュラム開始後十年の長期を見越した教育内容を検討している。しかし中・長期、短期計画の明示は無	

		く整合性の評価は困難であり、今後の課題である。・自己点検・自己評価は年1回実施。新年度では、その結果より課題を抽出し、教育理念・教育目的・教育目標を再認識し、看護教育に繋げることができたと考える。	
VI	入学	評価点 2.7(適切)	評価点 2.8(適切)
	入学者選抜 入学状況、入学者の 推移	・昨年度より平均は0.1低下。推薦入試及び社会人入試の定着と学校訪問等により、入学者の定員確保に努めている。今年度は、広報活動を幅広く行うなど改善を図った。しかし、現状としては、少子化と大学志向の高まりなどにより地元進学志向は変化し、定員数確保と共に学力の高い学生獲得には困難を呈している。	
VII	卒業・就職・進学	評価点 2.5(適切)	評価点 2.6(適切)
	卒業時の到達状況 就業・進学 卒業生の把握	・昨年度より平均は0.1低下。学生への学校評価アンケートや成績状況から卒業時の到達状況を把握している。厚労省委託外部団体によるキャリアアップ研修や卒業時技術到達の評価を行い、卒業時技術到達を達成させてから卒業に繋いでいる。今年度卒業生の地域定着率は昨年より上昇し、市内就職約7割、県内約7.5割となった。しかし、学校説明会や広報活動、入学生への説明などから、指定校・一般推薦卒や社会人卒による市内就職への定着へ繋がっていると考える。卒業後の就職先等の評価・活動状況把握は実施できていない状況であり、この点が昨年より評価を下げた要因となる。新カリキュラムの卒業生が卒業して1年目であり、卒業後のデータを収集して、本校の教育内容にフィードバックし、就職時支援に繋げることも可能であると考え。指定校推薦卒や社会人卒導入開始時の令和3年度から比較すると市内就職割合は上昇してきている。今後も適切な説明による看護学校の認知向上につなげる必要がある。	
VIII	地域社会・国際交流	評価点 2.4(ほぼ適切)	評価点 2.4(ほぼ適切)
	地域との連携と社会 への貢献 国際的な視野を広げ るための授業や環境 整備	・昨年度と平均は同様。授業科目では1年次の文化人類学では台湾出身の非常勤講師をむかえ台湾文化や多国の文化に触れている。3年次には、教科外活動として異文化交流を実施し、カピックセンターにて香港大学の学生と交流を図り異文化に触れ多様な人間の理解を深めた。1年次の、外国語Ⅰでは、アメリカ出身の非常勤講師によりネイティブな医学に関する外国語に触れている。また2年次では外国語Ⅱにおいて、大学の国際交流センター長(教授)による英語絵本の多読、医療英会話教育等にはアクティブに楽しく取り組んでいる。新カリキュラムより教科外活動の特別活動として地域理解研修を行っている。毎年、鹿屋市の地域特性を理解するために国立療養所星塚敬愛園と鹿屋航空基地資料館を訪問し、地域特有の歴史と生活者の思いを知る機会となっている。地域活動のボランティアには、全学年が貢献しており、地域との交流もでき学びの機会を学生自ら開拓する様子がある。海外からの受け入れ体制に関しては、学校として対応できるか検討をしている段階であり、評価が低くなっていると考え。	

IX	研究	評価点 2.6(適切)	評価点 2.4(ほぼ適切)
	教員の研究活動の充実	・昨年度より平均は 0.2 上昇。令和 5 年度より上昇しており、今年度で適切な評価となった。看護研究推進委員が校務分掌に位置付けられ、研究を行うにあたっての時間確保や相談役の確保、予算等の環境整備が整えられた結果の評価であると考え。今後も、看護研究推進委員会を中心に、教職員全員が日々の看護教育の視点を意識して、研究を継続することが望ましい。	